

を述べました。知識も生活力もない女性がノラのまねをして社会に飛び出したら、行く末は野垂れ死にか媚婦になるしかない。そういう状況のなかでの清水安三さんの活躍は瞳目に値します。

同じ頃、京都の綾部に郡是（現：グンゼ株式会社）という会社がありました。創設者はクリスチャンです。女工といえども同じ人間であると理解して、女工さん全員に「より良く生きる」ための高等教育を施したのです。良識をわきまえた人はいつの時代でもおられるのです。

藤樹さんの時代には日本は平和になり、中国の外交関係も安定して、中国から学術情報が一気に沢山入ってきました。中国の輸出港は餘姚（よらう）です。王陽明と縁の深い港です。四百年の落差がありましたから、日本側はビックリしました。明治時代の初めにヨーロッパの情報が一気に日本に入ってきましたとき、日本の知識人がビックリしたのと同じです。大方の知識人は「鸚鵡」の役割を果たしましたが、自立した思索者も誕生します。その典型が西田幾多郎です。

明治憲法の時代は、男の人にとっては、「いかに生きるか」ではなくして、「いかに死ぬか」がテーマでした。人生二十年です。兵隊にとら

れて戦場に派遣されたら大方は一年以内に死ぬのです。藤樹さんは「死ぬ哲学」とは無縁でした。民主主義とは制度のことではありません。民一人一人が自分の人生の主人公だという意味です。選挙のときは棄権をしない。候補者のなかに共感する人がいない時には自分の名前を書いた方がいいのです。勿論無効票になりませんが、でも、民主主義を支持する意思表示にはなります。候補者を育てるのは選挙民です。一人一人が「良く生きる」ことを大事にすることが肝腎なのです。中江藤樹さんは民主主義の時代の人ではありませんが、「良く生きる」ことを主眼にして門人知友と切磋琢磨した人でした。

（次号につづく）

講演内容は、淵田豊朗副会長によって文章化されたものです。

後編は、次号に掲載しますので、お楽しみにしてください。



「藤樹かるた」の紹介④

（企画広報委員会）

（かるたと解説）

て 天と地と 先祖に感謝

十二歳

藤樹先生は十二歳の頃には、食事の時にはいつも天と地の恵み、そしてご先祖、両親の労苦に対して感謝しつつ、ご飯のいただける喜びを感じておられた。



あ 新しい 年を迎えて

詩を詠む

藤樹先生は歌や詩をたくさん作っておられるが、二十六歳の正月「小川村に一人で暮らしている母が心配である。一日も早く故郷へ帰り、人の子として最も大切な親への孝養を尽くしたい」とやむにやまれぬ気持ちに詩に書いておられる。



さ 先に立つ 農夫衣服を改める

藤樹先生の死後の話。ある時、ひとりの武士が西近江路を通り、先生のお墓にお参りしようとして、道ばたで働いていた農夫に道を尋ねると、その農夫はまず家に帰って、衣服を着替えてから、玉林寺門前のお墓へうやうやしく武士を案内した。その農夫の心構えに驚くとともに、先生の遺徳の偉大さに改めて敬服した。

